

文科省の英語教育改革を見据えて準備すべきことは

開倫塾

塾長 林 明夫

1. おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。
2. 今朝は、宇都宮市の鬼怒中学校、赤松原中学校、鹿沼東中学校の生徒さんが社会科見学として「開倫塾の時間」の録音の様子をスタジオに見学に来てくださっています。皆さん、おはようございます。よろしくお願ひします。
3. 今日の「開倫塾の時間」では、下村博文氏が先週9月3日に文部科学大臣に再任されて教育改革がこれから先たくさん進みますので、その一つである英語教育改革についてお話をさせていただきます。下村文部科学大臣は、私の古くからの友だちです。本当に信念を曲げない方ですので、第2期と言いますか、再任された後もおそらく教育改革をたくさん進めていかれると思います。英語教育改革も本当に熱心に進めるとお思いますので、放送をお聴きの皆様も改革の中身を十分に認識なさった上で、これからの英語教育を考えていただきたいとお思います。
4. グローバル化が急激に進んでいるため、日本の英語教育は今から4年後、2018年に大幅に変わろうとしています。例えば、小学校では3・4年生が週に1コマないし2コマ、5・6年生は週に3コマ程度英語の授業が行われます。また、今も少し行われていますが、中学校では英語の授業を英語で行うことが基本になります。高校では授業を英語で行うと共に、発表・討論・交渉なども英語で行うことを目標にしています。中学校や高校ではかなりレベルの高い英語教育が行われる、小学校でも3年生から英語の授業が正式な形で入るということで、これは日本の英語教育にとって大改革になります。
5. そして、大学では英語以外のいろいろな科目の授業も英語で行われることになります。そのような学部や学科が増えたとお言いますか、本当に増えてきます。また、日本から海外へ留学する学生

もとても増えてきます。小学校・中学校・高校でこれほど英語を勉強すると、大学から留学をしても大丈夫な方がたくさん増えてきますので、留学生が増えます。同時に、外国からの留学生もどんどん来るようになります。これが下村博文大臣はじめ文部科学省で考えている英語教育の中身です。

6. この動きを非常に強力なアクセルをもって加速させるのが、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催です。そこで、栃木県でも2020年を見据えて、独自の英語教育を全面展開することが必要になってくると思います。その時になってから泥で縄を縛うように何かを急に始めるよりは、今から十分に準備をして実験したり企画したりして、県民、学校の先生、生徒さんなどと共にそれに備えることが大事であると思います。そのために、県や市町の教育委員会が中心になって、文部科学省の英語教育改革の動向を見据えて本音で英語教育について話し合う場を発足することを提案させていただきます。

7. そして、そこでの議論や提言を踏まえた独自の英語教育を強力に推し進めていただきたいと思います。その時に大事なのは、どのような中身を教えるのかというカリキュラム、つまり英語教育の中身です。加えて、先生の能力をどのように強化するかということも大事です。今、日本語で教えている先生が急に英語で教えることはとても難しいです。ですから、どのようにしたら先生方が上手く英語で授業をすることができるかを4年間かけて構築する必要があります。また、英語での討論や議論の仕方をどのように生徒に教えるかということもとても難しいので、その分野での先生方の能力強化も必要です。そして、教育委員会などの体制もつくっていかねばなりません。

8. さらに、小学校の英語教育と中学校の英語教育が上手くつながるように、小学校と中学校をどのように連携するのかを考えることが大事です。一番つながっていないのが中学校と高校ですので、中学校と高校をどのようにして連携させるか、そのために高校入試をどうするかを考えることも大事です。高校まではこのような形で改革しても、大学が違うことをやっていたのでは効率的ではありませんので、高校と大学の連携もとても必要です。つまり、小学校と中学校・小中の連携、中学校と高校・中高の連携、高校と大学・高大の連携が必要です。もしかしたら、幼稚園でも英語を勉強するようになりますので、幼稚園と小学校の連携も必要かもしれません。これらのことをしっかりと議論した上で、がんばって独自の英語教育を強力に推進していただきたいと思います。

9. ちなみに、足利市では、足利市教育委員会の中に外部の有識者を多数お招きして足利市英語教育プロジェクトチーム会議というものを発足しました。私もその委員の一人でした。1年かけて熱心

な議論を積み重ね、本格的な提言を策定して、現在その工程表に基づいて改革を進めています。足利市の中学校には英語の先生が35名いますが、そのうちの30名以上の先生方が既に英語で授業を行っています。ALTの先生方との連携も非常に盛んで、ALTの先生方も本当に熱心に教えています。これは、市の教育委員会の努力と先生方の努力、また、生徒さんや保護者の皆さんの協力のおかげであると思います。もしかしたら足利市の英語教育は日本で有数のレベルまで達しているのではないかと思います。私もALTの先生方の授業を随分見ましたが、本当に素晴らしく、市民として誇りに思うほどです。

10. これに加えて、小学校3年生から学校で英語を習いますと、中学校や高校での英語教育の内容も大分変わってきます。例えば、数学を英語で学ぶ、理科を英語で学ぶ、社会を英語で学ぶ、体育を英語で学ぶ、音楽を英語で学ぶというように英語以外の教科を英語で学んだり、例えば、中国語やハングル語、スペイン語などの言語を第2外国語として小学校の頃から学んだりする時代がきます。他の国ではかなり行っていますので、その準備も2018年までに抜かりなく行う必要があると思います。

11. ただ、このような英語教育改革を進めるには教育委員会や学校の先生方の負担がものすごく増えます。ですから、これらの活動が十分にできるような環境づくり、具体的には予算をつけたり先生方に授業の準備をする時間をたくさん持っていただくためにスタッフを増やしたりするなどの準備をしていただきたいと思います。

12. 今日は、今までの文部科学大臣も熱心でしたが、再任された下村博文 文部科学大臣は本当に熱心に教育改革を推進しようとしていますので、その1つである英語教育改革を栃木県でもぜひ進めていただきたいということを中心にお話をいたしました。ちなみに、下村大臣は「自分は文部科学大臣になるために生まれてきた」と思っている方です。小学校3年生の時にお父さんを亡くされてお母さんの手で育てられたのですが、自分のような子供たちを世の中に送り出してはいけないという信念のもとに中学生の頃から自分は文部科学大臣になるのだと決意し、新聞配達をしながら高校と大学を出て今の地位に至りました。

13. この改革は必ず成し遂げられると思いますので、皆様もぜひ改革の様子を見ていただき、また、栃木県の英語教育をはじめいろいろな教育をどうするかを考えていただければと思います。